

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

理解を示す際に用いられることわざ--ことわざの新たな用法の記述--

著者	平川 裕己
雑誌名	神戸市外国語大学研究科論集
号	20
ページ	1-23
発行年	2017-12-24
URL	http://id.nii.ac.jp/1085/00002159/

理解を示す際に用いられることわざ

—ことわざの新たな用法の記述—

平川裕己

Abstract

This article focusses on the deployment and interpretation of proverbs in conversational discourse. In previous studies, several ways of using proverbs have been offered, but there is one kind of proverb usage that has gone unnoticed. This paper refers to it as the 'receptive usage,' and explores its characteristics from a rhetorical point of view. The main features of the receptive usage are: (i) that speakers apply a proverb to their interlocutor's utterance/opinion in order to show demonstratively how they received it; (ii) they attribute the 'social authority' of the proverb to the utterance/opinion; and (iii) the use of the proverb is further evaluated by the producer of the utterance/opinion as to whether the speakers' understanding of it is appropriate. It is argued that the receptive usage of proverbs as described here can contribute to the methodology of the study of proverbs in general.

1. はじめに

ことわざにまつわるこれまでの研究は、ことわざに複数の使い方があることを明らかにしてきた。しかし実例を広く観察すると、既知の用法には当てはまらない使い方があることが分かる。本稿の目的は、従来の研究では触れられることのなかったことわざの新たな用法を記述することである。まずは、その具体例を示そう。

(1)は映画 007 シリーズの一作 *Goldfinger* からの抜粋である。秘密結社の首領 Goldfinger は、自らの組織に潜入していた英国諜報部員 Bond を捕える。組織の計画が成功した暁に手に入る大金について彼が女性部下 Pussy と話していると、Bond の仲間が彼らを監視しているとの報告が入る。彼の潜入があたかも上手くいっているかのよう装うため、Goldfinger は Pussy に Bond と楽しく過ごして見せるよう指示する（以下、例文中の下線は全て引用者による）。

(1) GOLDFINGER: We were quite right to spare Mr. Bond's life in Switzerland. If those gentlemen are his friends, let us convince them he needs no assistance. For their benefit, Pussy, let's make him as happy as possible. I suggest you change into something more suitable.

PUSSY: [*smiling*] Certainly. Business before pleasure.

[*PUSSY stands up to leave. GOLDFINGER chortles.*]

Pussy はことわざ（下線部）を用いることによって、Goldfinger の指示を理解したことを示している。既知の諸用法がことわざによって話し手自身の評価を示したり意見を主張したりする話者主体の使い方であったのに対し、この新用法は会話相手の意見や主張をことわざによって受け止める受容的な使い方である。本稿はこの使い方をことわざの「受容的用法」(receptive usage)と呼び、その使用上の特徴をレトリック研究の立場から詳らかにする。あらかじめ述べておくと、受容的用法は次の特徴をもつ。(i)ことわざを会話相手に帰属させ、その相手が発言した内容に対する理解の仕方を実演する方法である。(ii)会話相手の発言内容にことわざの社会的権威が付与される。(iii)話者が実演した理解の仕方は、その妥当性を会話相手によって評価される。これらの点の具体的な記述を足がかりとして、本稿ではことわざの使用を研究する方法についても考察する。

議論は以下の手順で進む。次の2節では、(1)のような受容的用法を特徴づけるための準備として、ことわざの使用に関する先行研究を概観する。3節では、2節で見る諸用法との関係を念頭に置きながら、受容的用法を詳細に記述する。4節では、受容的用法の記述と関連づけながら、ことわざ研究の方法について議論を進める。最後の5節では、本稿の議論をまとめ、今後の課題と展望を示す。

2. ことわざの使用にまつわる先行研究

まずは、受容的用法が従来記述されてきた用法に当てはまらないことを確認するため、先行研究がことわざの使用について明らかにしてきたことを跡づけておこう。ことわざの使用に関する研究には、大きくふたつの種類がある。ひとつは、ことわざの使用とディスコースの構造との関わりを明らかにするもの。もうひとつは、ことわざをディスコースにおいて用いる際のレトリックを記述するものである。受容的用法の記述との関わりで重要なのは、後者の研究による知見である。

2.1 ことわざの使用とディスコースの構造

ある種の表現の使用はディスコースに一定の構造をもたらす。例えば Drew & Holt (1988, 1998)によると、慣用的な比喩表現(figurative expression)は、会話において話題の終了や移行にしばしば利用される。次の例を見よう。

- (2) 01 P: .hhh But I think it'll iron itself out,
 02 Q: I sure hope [so.
 03 P: [I'll see you Tuesday. (Drew & Holt, 1988: 506¹)

01 行目で P はそれまでに語ってきた内容を比喩表現 ("it'll iron itself out" ; "it" は P が抱えるトラブルを指して用いられた"everything"を受けている) によってまとめる。P はここで、直前で語っていた具体的な出来事から離れ、その出来事に対する評価を示している。P の比喩表現による評価・要約に対し、Q は同意を示す(02 行目)。同意の行為は、当の話題に新たな展開をもたらさない。つまり、語りの要約への同意は、それまでの話題を前に進めないという(消極的な)選択を示すこととなる(Drew & Holt, 1998: 505)。P は Q の同意を受け、それまでの話題(P 自身が語ってきたトラブル)を切り上げて会話を終了に向ける(03 行目)。慣用的な比喩表現は、このように、話題の終了・移行に利用可能な資源である(Drew & Holt, 1998: 502)。

(2)のような比喩表現による話題の終了・移行は、基本的に以下の手順で行われる。

- (3) 1→ Speaker A: Figurative summary
 2→ Speaker B: Agreement (or other expression of contiguity)
 3→ Speaker A: Agreement/confirmation
 4→ Speaker A/B: Introduces next topic (Drew & Holt, 1998: 506)

(3)は、慣用的な比喩表現の使用に端を発する一連の行為連鎖を捉えたものである。まず、話者 A は比喩表現を使うことで(矢印1)、それまでに語ってきた具体的で詳細な内容から離れ、それについての評価を示す(Drew & Holt, 1998: 503)。A の評価に対する話者 B の同意(矢印2)は、当面の話題を展開させ

¹ .h は吸気音、下線 (I) は強調して発話されていること、コンマ (,) は継続を示す抑揚で発話されていること、カッコ (I) は発話の重なる開始位置、ピリオド (.) は下降調の抑揚で発話されていることを、それぞれ表す (Atkinson & Heritage, 1984: ix-xvi)。

ない。この同意がさらに話者 A の同意（矢印 3）を得て、その話題は終了に至る²。こうしてひとつの話題が終了した後の位置では、どちらの話者にとっても新たな話題の導入が可能となる（矢印 4）。

(3)の連鎖は、第一に、比喩表現の使用を糸口として、参加者が相互行為のなかで会話を組織していく手順として位置づけられる³。比喩表現の使用は、単にそれまでの話題をまとめるという個人的な行為であるだけでなく、会話というディスコースを一定の方向に導く行為でもある。ある話題が(3)の手順を経て終了・移行されるとき、会話には一定の構造が現れる。(3)の定式化は、第二に、この構造を捉えたものと位置づけられる。こうして、Drew & Holt (1988, 1998)は慣用的な比喩表現の使用がディスコースの構造と結びつくものであることを明らかにした。

Drew & Holt (1998)が明らかにした(3)の構造は、ことわざにも妥当すると考えられる。彼ら自身が「慣用的な比喩表現」にことわざを含めているし (Drew & Holt, 1988: 398 ; Drew & Holt, 1998: 497) , 「比喩的であること、総括的意味をもつこと、評価を含むことなどの特性において」 (武田, 1999: 24) 比喩表現はことわざと共通する。両者は共に、それまでに語ってきた具体的で詳細な内容からは距離をとり、それに対する評価を示すための資源として利用可能である。こうした共通点に鑑みて、彼らの分析はことわざにも十分に当てはまると言える。(3)の構造は、ことわざの使用による話題の終了・移行がディスコースにもたらす構造でもあるのだ。

ことわざの使用がディスコースの構造と関わりをもつのは、会話に特有の特徴ではない。武田 (1999)は、Drew & Holt (1998)の知見に加えて、新聞の投書欄やテレビ番組でのインタビューにおいてことわざがトピックの要約を行う構造的な位置で使用されることを指摘した。武田によると、ことわざによってトピックを要約できるのは、ことわざが「状況を要約し、かつ判断を下す」資源である

² ただし、(2)で P がそうしているように、話者 A は次の話題に移ることによって、話者 B への同意への同意（矢印 3）を遂行することができる。

³ もちろん、比喩表現の使用が常に話題の終了・移行に結びつく、というわけではない。会話は、その本質的に相互行為的な性格ゆえに、参加者それぞれがそのつどなす行為に依拠して展開していく (Schegloff, 2007, 2015)。だから例えば、(2)02 行目の Q の同意を受けた後、P は 03 行目以降でもさらに同じ話題で話し続けることもできる。また、参加者間の意見の相違によって、比喩表現の使用による話題の終了・移行が失敗する場合もある (Drew & Holt, 1998: 510-518)。(3)の定式化が示しているのは、比喩表現によって話題が終了・移行する標準的な手順である (Drew & Holt, 1998: 506)。

からだという（武田, 1999: 26）。武田が例証したように、ことわざの使用は、複数のジャンルにおいてディスコースの構造と結びついている。

しかしながら、ディスコースの構造的側面について見れば、受容的用法はことわざの新しい使い方ではない。Drew & Holt (1988, 1999)の指摘に違わず、ことわざの受容的な使用も話題の終了・移行の手順の一部として位置づけられる。例えば前節で挙げた(1)において、Pussy のことわざはちょうど話題の終了部分（および場面の転換点）に位置しており、彼女のことわざは当面の話題を閉じる行為と結びついている。相手の指示を理解したことを示し、そのとおりに行動し始めることは、まさに話題を終了させる行為にほかならない。つまり(1)の事例は、(3)に示した話題の終了と移行という会話の展開・構造について観察するならば、これまでの記述から外れる新たな使い方とは言えない。

では、ことわざの受容的用法を記述することの意義はどこにあるのか。この用法の新しさは、レトリックとしてことわざの使用を眺めて明らかになる。そこで次の節では、この観点からことわざの使用を扱った研究を見よう。

2.2 Norrick (1985) のことわざの 3 用法

ことわざの用法をレトリックの観点から記述した研究としては、Norrick (1985: ch. 2)が重要である⁴。Norrick は、Svartvik and Quirk (1980)および Hain (1951)をもとに会話におけることわざの用法を記述した。前者は英語話者同士の会話を転写したもの、後者はドイツ語話者同士の会話を記述したものである。Norrick によると、会話におけることわざの使い方は“Evaluative Comment”（評価的論評），“Evaluative Argument”（評価的論拠），“Direct Application”（直接的適用）の 3 つに分類できる（Norrick, 1985: 12-18；名称の日本語訳は武田 (1992a: 42)による）。Norrick はさらに、これらの 3 用法が文学作品や新聞においても同様に観察されることを示した（Norrick, 1985: 18-24）⁵。

武田 (1992a: 54)が指摘するとおり、Norrick の 3 分類は個別のことわざの意味内容に基づくものではなく、ことわざが実際に使用されるときの方法を分類し

⁴ ただし、Norrick 自身はレトリック研究への寄与を念頭に置いているわけではない。

⁵ Norrick (1985)は 3 つの用法それぞれの特徴を示すのみで、それらの相互関係を明らかにしなかった。また、Norrick の 3 分類を評価した武田 (1992a)は、3 用法を関係づけながら整理したが、そのやり方には問題が含まれている。ディスコースにおいてことわざがどう使われるかを理解するためのひとつのやり方として、Norrick が示した 3 つの用法を精緻化・体系化していく、という方法は価値あるものだと思う。だが、そうした議論は本稿の手に余る。ここでは受容的用法の記述に焦点を絞り、ことわざの諸用法の整理は稿を改めて試みたい。

たものである。このことは彼の分類を理解するうえで極めて重要である。また、言語学の分野において、それまでは形式的特徴や意味内容への関心（e.g., Dundes, 1975 ; Milner, 1969 ; Rothstein, 1969 ; Silverstein-Weinrich, 1978）が主であったことわざ研究に使用の観点を導入した点で、この分類は有意義である。他方、Norrick (1985)は、3つの用法がどのような仕組みで可能になっているのかを論じることはなかった。そこで以下では、Norrick の3用法を概観すると同時に、それらがことわざの定型句としての性質に支えられたものであることを示そう。

まず、直接的適用は、話し手が目の前の事態に対して評価を示すことに主眼を置かず、直接ことわざを当てはめる用法である（Norrick, 1985: 16）。ことわざを直接当てはめることで、そのことわざどおりの事態が目の前に現れたことを指摘する、という使い方である。例えば、話題にしていた人物が現れた時に「噂をすれば」と言う場合などが、この用法にあたる。

直接的適用は、ことわざの定型性に支えられている。ことわざは「われわれがくり返し出会う似たような状況を類型としてとらえ、定型句のかたちで公式化したもの」（武田, 1992b: 213）である。ことわざが備えるこの事態の類型性を利用する方法が、直接的適用である。つまり、「事実をことわざによって、ありのままにたとえることに重点」を置くことで（武田, 1992a: 53）、話者は、目の前の事態を一回限りの特殊なものではなく、それまでも繰り返し起こってきた同種の事態の一例として特徴づける。ことわざを当てはめることで、その事態を「より一般的な法則性のなかの一事例」（佐藤, 1987: 238）として位置づけてみせるわけだ。直接的適用は、このように、ことわざを当てはめることによって目の前の事態を類型化してみせる用法である。

直接的適用がことわざを目の前に「直接」（つまり評価を述べることを指向せずに）当てはめる方法であるのに対し、評価的論評と評価的論拠は、話者の意見や主張の提示と関わる（Norrick, 1985: 16 ; 武田, 1992a: 52-53）。Norrick がこれら2つの用法を“evaluative”（「評価的」）と呼んだのは、こうした特徴に基づいてのことと思われる。

評価的論拠は、長い発話の一部でことわざが利用される場合を指す（Norrick, 1985: 15-16）。Norrick によると、この用法には2種類の方法が含まれる。1つ目は、ことわざを主張の手立てとして利用する方法である。特に、議論のなかで価値判断を示し、自分の立場の根拠としてことわざを利用する場合を指す（Norrick, 1985: 16）。例えば「石の上にも3年と言うし、もう少し続けるべきだよ」のように述べる場合がこれにあたる。評価的論拠の2つ目は、語りの内容をことわざによってまとめ、評価を示す方法である（Norrick, 1985: 15）。例

えば、失敗談の最後に「やっぱり壁に耳あり障子に目ありというのは本当ですね」などと述べる場合である。評価的論拠は、以上のように、意見の根拠を示す方法と語りの要約を示す方法の2つを含む用法である。Norrick 自身は長い発話の中でことわざが引かれるという形式上の特徴に基づいて分類しているが、いずれの方法もことわざが話者自身の評価を示す点で共通する。さらに、Norrick は述べていないが、これら2つの方法は、話者の評価と関わる点において評価的論評とも通底する（武田, 1992a: 42）。

評価的論評は、ことわざを相手の発言や目の前の事態に当てはめ、それに対する評価を示す方法である（Norrick, 1985: 13）。例えば、上司のことばを引いて処世訓を語る同僚に「虎の威を借る狐だな」と言う場合や、寒い朝に子どもが元気よく遊びに行くのを見て「子どもは風の子だね」と言うような場合（武田, 1992a: 55）が、この用法に当てはまる。ことわざは、このように「対象についての価値判断をまじえた論評」を述べるときに利用される（武田, 1992a: 45）。こうした使い方が評価的論評である。

ことわざの評価的な使用（つまり評価的論評や評価的論拠としての使用）は、ことわざが一定の権威を帯びた定型句であるということと密接に関わる。ことわざには、よくある類型的な事態に対する人々の態度が込められている（Burke, 1973: 296-297）。ここでいう「態度」は、事態への評価や価値判断を指す（cf. 武田, 1992a: ch. 2）。ことわざに込められたこのような態度には、それらが繰り返し用いられてきたという事実によって「無数の人々の暗黙の承認」が与えられている（佐藤, 1987: 239）。ことわざが内包する態度は、こうして、社会的に権威づけられている。ことわざの権威は、個別の使用においては基本的にその正しさが前提とされる、というかたちで表れる（Sacks, 1992: 110; Yankah, 1994: 3386）。評価的論評や評価的論拠という方法でことわざを用いることは、ことわざがもつこの権威をディスコースにおいて実践することにほかならない。ことわざを引くことによって、話者は自らの評価や主張を権威づける（Norrick, 1985: 28）。ことわざの評価的な使用は、こうして、ことわざが帯びる権威に支えられている。

Norrick (1985: ch. 2)は、以上のように、ことわざに3つの用法があることを指摘した。ディスコースのなかでことわざを使用することで話者が行うのは、事態を類型化してみせる（直接的適用）、事態への評価を示す（評価的論評）、語りを要約したり主張を根拠づける（評価的論拠）、という行為である。これらに共通するのは、話者が目の前の事態に対する自分自身の見方を示す際にことわざを利用するという点である。端的にまとめれば、Norrick (1985)の3用法は、ことわざの「主体的な」使用を捉えたものと位置づけられる。

だが、そうした主体的な使用方法は、いずれも(1)におけることわざの使い方に当てはまらない。この点は明確におさえておかなくてはならない。3つの用法それぞれについて、順に確認しよう。議論の便宜を図って、(1)を再掲する。Goldfinger の指示に対し、pussy は下線部のことわざを用いることで了解の意を表している。

(4) (= (1))

GOLDFINGER: We were quite right to spare Mr. Bond's life in Switzerland. If those gentlemen are his friends, let us convince them he needs no assistance. For their benefit, Pussy, let's make him as happy as possible. I suggest you change into something more suitable.

PUSSY: [smiling] Certainly. Business before pleasure.

[PUSSY stands up to leave. GOLDFINGER chortles.]

まず、(4)が直接的適用ではないことを示そう。直接的適用は目の前の事態をことわざによって類型化してみせる方法である。だが、このやりとりにおいて Pussy は Goldfinger の指示をことわざによってありのままにたとえ、目の前の事態（他者が自分に指示を出したという事態）がこのことわざのとおりであることを指摘しているわけではない。だから、この例は直接的適用とは見なせない。

次に、評価的論拠について確認しよう。この用法は、長い発話の中でことわざを使い、主張の根拠を示したり、語りをまとめて評価する方法である。しかし、(4)に明らかなおとおり、Pussy は長い発話の一部でことわざを用いているわけではない。加えて、自らの主張を根拠づけるうえでことわざを利用しているわけでもないし、ことわざによって語ってきた内容をまとめて評価しているわけでもない。そもそも、彼女は主張や語りをしていない。したがって、ここでのことわざの使用は、評価的論拠と見ることもできない。

最後に、(4)は評価的論評でもないことを見よう。評価的論評は、話し相手の発言や目の前の事態に対する話者の評価をことわざを引くことによって示す方法である。(4)のことわざは、相手のことばに当てはめられているという点では、評価的論評であるかのように見える。しかし、このやりとりで Pussy は Goldfinger の指示を彼女自身の立場から評価しているわけではない。よって、彼女のことわざの使い方は、評価的論評とも異なっている。

以上のとおり、(4)におけることわざの使用方法は、Norrick (1985)が記述した3つの用法のいずれにも妥当しない。受容的用法はことわざの新しい使い方である。

3. ことわざの新たな使い方：受容的用法

では、受容的用法はことわざをどのように用いる方法なのか。本節では、この新たな用法がもつ特徴を、ことわざという定型句が有する性質と関連づけながら詳しく記述する。

3.1 ことわざによる理解の実演

まずは（繰り返しになるが）1 節で見た例を再び観察することから始めよう。秘密結社の首領 Goldfinger が、諜報部員 Bond の潜入が成功しているかのよう装うため、女性部下 Pussy に指示を与える場面である。

(5) (=1))

GOLDFINGER: We were quite right to spare Mr. Bond's life in Switzerland. If those gentlemen are his friends, let us convince them he needs no assistance. For their benefit, Pussy, let's make him as happy as possible. I suggest you change into something more suitable.

PUSSY: [*smiling*] ^(a)Certainly. ^(b)Business before pleasure.

[*PUSSY stands up to leave. GOLDFINGER chortles.*]

上司 Goldfinger の指示を受けた Pussy は、了解した旨を(5a)の返答によって示し、続いて(5b)のことわざを引く。準備に向かう Pussy を見送りながら、Goldfinger は満足げな笑いを漏らす。

(5)の要点は、Pussy が Goldfinger の考えを表すものとしてことわざを利用しているところにある。(5b)では、"business"が Bond の潜入が成功しているよう装うことに、"pleasure"が最終的に手に入る大金に、それぞれ対応する。そして"before"による接続が、大金を得ることに偽装が先行すべきという優先順位に対応する。これは、直前までに Goldfinger が述べた内容（計画を成功させて大金を得るため、偽装によって諜報部員たちの監視の目を欺く）と軌を一にする。つまり、(5b)のことわざは、それを発言した Pussy 自身ではなく、彼女に指示を与えた Goldfinger のことばに連なるものとして組み立てられている。こうして、Pussy は Goldfinger の意図を汲み取ったことを「実演」(demonstrate; Sacks, 1992, vol. 2: 141-142) しているのだ。受容的用法は、このように、ことわざを会話相

手に帰属させることで、相手の意見に対する理解を実演的に示す方法である⁶。

受容的用法は、ことわざ以外の方法で相手の意見を受ける場合とは異なる特徴を示す。ことわざを用いて意見を受けることは、相手の主張を理解したことだけでなく、それが慣習的な知識に裏づけられていると認めることを意味する。ことわざ（の知恵）は無数の人々による承認と保証を得たものであり、その結果ことわざは社会的な権威を帯びている（佐藤, 1987: 237 ; Yankah, 1994: 3388）。だから、話し相手にことわざを帰属させれば、その社会的権威を当の相手に付与することになる。受容的用法による理解の実演は、会話の相手にことわざの権威を付与するという帰結を伴う。

この点に関して、受容的用法は他の用法と対照的だ。Norrick (1985)が指摘したことわざの用法（直接的適用、評価的論拠、評価的論評）は、どれもことわざを話し手自身のものとして（つまり話者自身に帰属させながら）用いる主体的な方法であった。ことわざを主体的に使用することで、話者は目の前の事態に対する自らの見方を示す。特に主張の根拠としてことわざを引く場合、そのことわざは話者の意見を権威づけ、話し相手の説得に寄与する。ことわざのこうした使用は、社会的権威を話者の側に布置するレトリックとなる。これに対し、受容的用法はことわざを話し相手に帰属させながら用いる方法である。相手のものとしてことわざを引くことで、話者は述べられた意見を同調的に理解したことを実演してみせる。このときことわざが権威を付与するのは、話者自身の考えではなく、ことわざの帰属先である話し相手の意見になる。したがって、受容的な使用は、ことわざの社会的権威を話し相手の側に布置するレトリックである。ことわざの受容的な使用は、権威の付与の仕方に関して主体的な使用と明確に異なる。

3.2 受容的用法に対する評価

(5)では、ことわざを受容的に用いることで話し相手への理解が示されていた。受容的用法の特徴を正確に捉えるために、この「相手への理解」が何を指すのか、より具体的に明らかにしておこう。「相手への理解をことわざで実演する」と言うとき、それが意味するのは、話し相手のことばや意見を話者自身がどのように理解したのか、ということ、つまり話者の側による理解の仕方にほかならない。重要なのは、そうして示された理解の仕方が当の会話相手の意図

⁶ ただし、相手のことばに対する「理解の実演」と「理解の主張」(claim)との峻別 (Sacks, 1992, vol. 2: 141-142) については、本稿が扱うデータの質との関連で注意が必要である。4節の議論を参照。

に鑑みて必ずしも「正しい」とは限らない、ということだ。

話を具体化しよう。以下の(6)は映画 *It's a Wonderful Life* からの抜粋である。主人公 George は Mary に恋心を抱いているが、恋敵 Sam に分があるとの思いから積極的になれない。そんな彼に対して、George の母親 (Mrs. Bailey) は、Mary が気に入っているのは Sam ではなく George であるとほのめかす。

(6) MRS. BAILEY: Well, I've got eyes, haven't I? Why, ^(a)she [=Mary] lights up like a firefly whenever you're around.

GEORGE: Oh...

MRS. BAILEY: And besides, ^(b)Sam Wainwright's away in New York, and you're here in Bedford Falls.

GEORGE: And ^(c)all's fair in love and war?

MRS. BAILEY: [*primly*] ^(d)I don't know about war.

GEORGE: ^(e)[laughs] Mother, you know, I can see right through you.

To right back to your back collar button. Trying to get rid of me, huh?

MRS. BAILEY: Uh-huh.

[*They kiss. MRS. BAILEY puts GEORGE's hat on his head.*]

(6a, 6b)で、Mrs. Bailey は Mary が好意を抱く相手が George だという理由を述べる。これに対し、George は「つまり恋と戦争では何でもありってことかい？」とことわざを続ける(5c)。その際、彼は母親のことばに"And"で接続することで、ことわざを彼女に帰属させる。

George の発言(6c)は、上昇調のイントネーションを伴って、母親の意図を確認するものとして組み立てられている。つまり、George はここで、母親の考えを理解したということを示しているわけではない。彼がここでやっているのは、自分が母親の考えをこのことわざに沿って理解したことを示し、その理解の仕方を当の母親に評価させることにほかならない。この例に端的に表れているとおり、受容的用法はことわざを用いる話者が相手のことばをどのように理解したのかを実演する方法である。

このことは、ことわざの受容的な使用について、ひとつの帰結をもたらす。それは、ことわざの受容的な使用は会話相手によってその妥当性の評価を受けることになる、ということである。つまり、ことわざによって示された理解の仕方が相手の意図に沿っているかどうか、当の話し相手によって示されるのだ。もちろん、相手からの評価は場合によって様々に異なる。例えば上で見た(5)で

は、Goldfinger の満足げな笑いは Pussy のことわざ ("Business before pleasure.") が彼の狙いを適切に捉えるものであったことを表している。他方(6)では、Mrs. Bailey は George の受容的なことわざ(6c)を承認しているものの(6d)、あくまで「戦争のことは分からない (が、恋愛については何でもありと言って差し支えない)」と注釈をつけるかたちをとっている。さらに言えば、(すぐ下で挙げる(7)のように) 受容的用法によって実演した理解の仕方が話し相手から棄却される場合もある。受容的用法は、話者の理解の仕方を実演する用法であるが故に、そこで実演的に示した理解の仕方が会話の相手によって評価されるのである。

受容的用法は、この点において他の用法と事情が異なる。ことわざによって意見を述べたり (評価的論評) 話者自身の語りをまとめたり (評価的論拠) する場合、あるいは目の前の事態を類型化してみせる場合 (直接的適用)、そのことわざの使用が妥当であるかどうかを相手の考えに照らして確かめる必要はない。受容的用法が会話相手による評価を受けるのは、この用法が相手のことばや意見への理解の仕方を提示するものだからにほかならない⁷。

3.3 受容的用法の「批判的」使用

これまで観察してきた受容的用法の事例において話者が実演的に示していた理解の仕方は、その会話相手に対して同調的なものであった。しかし、この用法は、そのように同調的な構えをとる場合のみに使用が限られるものではない。相手と対立しその考えを批判しようとする場合にも同様に利用可能である。

(7)は Agatha Christie の小説 *Murder on the Orient Express* からの抜粋である。パリに向かう寝台列車オリエント急行の車中で1人の男が殺害される。列車に偶然乗り合わせたベルギー人探偵 Poirot は、事件解決のため乗客に聞き込みを行う。英国人女性 Mary Debenham の客室を調べる際、Poirot は彼女と一緒にいた Greta Ohlsson が部屋から出ていくよう差し向ける。

(7) Miss Debenham had put her book down. She was watching Poirot. When he asked her, she handed over her keys. Then, as he lifted down a case and opened it, she said:

“(a) Why did you send her away, M. Poirot?”

“I, Mademoiselle! (b) Why, to minister to the American lady.”

⁷ Drew & Holt (1988; 1998)が示した話題の終了・移行の手続き(3)に即して述べれば、会話相手からの評価は矢印2の"Agreement (or other expression of contiguity)"に相当する。この手続き上の重なりは、受容的用法が話題の終了・移行に利用可能であることを示している。

“(c)An excellent pretext—but a pretext all the same.”

“(d)I don’t understand you, Mademoiselle.”

“(e)I think you understand me very well.” She smiled. “You wanted to get me alone. Wasn’t that it?”

“(f)You are putting words into my mouth, Mademoiselle.”

“(g)And ideas into your head? No, I don’t think so. The ideas are already there. That is right, isn’t it?”

“(h)Mademoiselle, we have a proverb—”

“(i)Qui s’excuse s’accuse—(j)is that what you were going to say? (k)You must give me the credit for a certain amount of observation and common sense. (l)For some reason or other you have got it into your head that I know something about this sordid business—(m)this murder of a man I never saw before.”

“(n)You are imagining things, Mademoiselle.”

“No, I am not imagining things at all. But it seems to me that a lot of time is wasted by not speaking the truth—by beating about the bush instead of coming straight out with things.”

まずは、ことわざ(7i)に至るまでの流れを確認しておこう。Ohlsson を部屋から出ていかせた理由を尋ねる Debenham(7a)に、Poirot は具合の悪くなった Mrs. Hubbard (“the American lady”) の様子を見てもらうためだと応じる(7b)。が、彼女は納得せず、それを Poirot の言い訳だと言う(7c)。彼女の意図を計りかねる Poirot(7d)に対し、Debenham は自分を一人にすることが彼の意図だったはずだと主張する(7e)。Poirot はこれを受けて、Debenham が彼に望むことばを言わせようとしていると反駁する(7f)。だが Debenham は、Poirot が自分の言ったとおりの狙いをもっているはずだとさらに言い返す(7g)。Poirot はことわざを返そうとするが(7h)、Debenham がそれを遮って話し始める(7i)。

Qui s’excuse s’accuse は「言い訳をする者は己を告発する者」(*he who excuses himself accuses himself*)という意味のフランスのことわざで、言い訳をする相手に対してそれが罪悪感の表れだ(*making excuses reveals a guilty conscience*)を指摘する際に用いられる (Merriam-Webster.Com, s.v. “Qui s’excuse s’accuse”)。ここでは、“Qui s’excuse”が Poirot に対して発してきた Debenham のことばに、“s’accuse”が Poirot に対する Debenham の反発は彼女の罪悪感によるものだという (Debenham が考える Poirot の) 見解に、それぞれ対応する。

ここでは、Poirot がことわざを言う前に Debenham が割り込んで話し始め (7h-i), 彼の発話を「先取り完了」(Lerner, 2004: 226-229 ; 串田, 2007: 160) させている点が特徴的である⁸。Poirot の言おうとしたことわざが彼女の述べたとおりであることを確認するような体裁をとっているものの (7j), 彼女は Poirot に発言権を渡すことなくことばを続けていく (7k-l)。発言をこのように組み立てることで Debenham がやっているのは、第一に, (7i) のことわざを Poirot に帰属させることである。Poirot のことばを代弁するかのように発せられている点で, 彼女のことわざの使い方は受容的用法と認められる。だが, Debenham の狙いは Poirot への同調的な理解を示すことではなく, 彼の「真の」意図が分かっていると主張することにある。Debenham の考えでは, Poirot が Ohlsson を Mrs. Hubbard の元に向かわせたのは, Debenham を独りにするためである (7e)。そしてそのような意図を隠しもつ Poirot の目に, 彼女の一連の発言はまさに「言い訳」と映ったはずだ。(7i) のことわざで彼女はこう主張している。このことはまた, 彼女が Poirot の言おうとしたことが分かる根拠 (7k) を述べていることから明らかである。理由や根拠を続けるという構成は, 日常的な議論において主張を述べる際の典型的なパターンである (Canary & Sillars, 1992: 746)。以上のように, Poirot の発話を (それに割り込むかたちで) 埋めながら発せられた Debenham のことわざは, 彼のことばへの同調的な理解の実演ではなく, 彼の「真の」意図を見透かしているという彼女自身の主張となっている。

Debenham は件のことわざに続けて, Poirot の「真の」意図に関する自身の見解を実質化していく。Poirot の言おうとしたことわざを言い当てられる根拠 (7k) を示した後, (7l) では彼が Debenham を独りにさせたいはずだと考える理由を述べる。つまり, 件の殺人について彼女が知っていることを吐かせるため (であるはず) だ, と。巧妙なことに, Debenham は Poirot が自分に疑いを持っているはずだと主張すると同時に, その疑念を明確な根拠を欠くもの ("For some reason or other") と評価している。加えて, 被害者を以前から知っていたわけではないという別の主張を, その事件 ("this sordid business") の描写の一部に滑り込ませている (7m)。こうして, Poirot の発言を先取りしてことわざを述べる行為を糸口に, Debenham は自分が件の殺人と関わっていないことを (つまりは身の潔白を) 主張しているのだ。そしてこの主張は, (7i) のことわざで捉えた (Debenham の考える) Poirot の疑念への反駁となっている。つまり, 彼女のことわざは, 会話の相手である Poirot への批判の出発点として位置づけられてい

⁸ なお, 発話の先取り完了は, 常に批判的な構えを伴ってなされるわけではない。話し相手との協調的行動として組み立てられた先取り完了の事例については, 林 (2017) を参照。

る。この意味で、Debenham のことわざは「批判的な」受容的用法と呼べる。

受容的用法をこのように批判的なやり方で用いることができるのは、この用法がことわざ（による評価や主張）を会話相手に帰属させる方法であるからにはほかならない。会話相手に対して同調的な構えをとる場合でも、話者の発することわざを話し相手に帰属させる点では同じである。しかし、そうした場合の主眼は、相手の発言に対する理解をことわざを用いて実演することにある。既に見たとおり、(4)で Pussy は Goldfinger の指示を一旦 "Certainly." と受けてから "Business before pleasure." とことわざを引いていたし、(5)で George は母親のことばに順接しながら上昇調で "And all's fair in love and war?" と確認していた。他方、批判的な受容的用法において、話者は相手の意見がかくあるはずだという自身の主張を、相手の考えとして示しながら発言を組み立てる。つまり、ことわざ（による評価や主張）を会話相手に帰属させることそれ自体が、この場合の主眼となる。実際、(7)では、Debenham は Poirot のことばを遮って話し始めるだけでなく (7h-i), ことわざ (7i) を引いた後に、それが彼の考えを言い当てているはずだという理由を挙げてもいる (7k-l)。評価的受容は、ことわざを繰り出す話者の見方を話し相手に帰属させる方法であるがゆえに、批判の手立てとしても利用可能なのだ。

もちろん、受容的用法の批判的な使用は、ある評価や主張を相手に帰属させる唯一の方法だというわけではない。同様のことは、例えば話法を用いて行うこともできる (cf. 伊原, 2017: 32-36 ; 山口, 2009: 54-57)。したがって (7i) のようなことわざの使い方は、発言の内容を他者に帰属させる方法のひとつと位置づけられる。

ただし、ある評価や主張を会話相手に帰属させる方法として、ことわざの利用は他の方法にはないレトリカルな特徴を示す。2節で他の用法との関連で議論したように、ことわざは社会の中で繰り返し用いられ共有されてきた定型句である。ことわざは目の前の事態を典型的に把握し一定の態度を示す手立てであるが (Burke, 1967: 296-297 ; 武田, 1992b: 213), 典型的であるということは、見方を変えれば、紋切り型で陳腐だということでもある (佐藤, 1987: 239-240)。受容的用法の批判的な利用は、相手の意見を陳腐なものの特徴づけながら自分自身はそこから距離をとることができる点で、レトリカルな戦略である。

(7)において Debenham が (英語で話しているのにもかかわらず) フランスのことわざを選んだことは、受容的用法による批判のレトリックとしての特徴をよく示している。彼女自身は英国人であるのに対し、Poirot はベルギーの仏語圏出身である。"Qui s'excuse s'accuse" という仏語のことわざを選択することで、「仏語を話す Poirot がいかにも言いそうなこと」として発言を組み立てながら、

Debenham 自身はそれが内包する態度に与しないことを巧みに示している。このように、ことわざによって話し相手の意見を捉えて批判するという方法は、その意見に陳腐なものという負の評価を同時に付与することを可能にする。これが、ことわざの受容的用法を批判に向けるレトリックの強さである。

受容的用法の批判的使用が示すこうした特徴は、この用法が二面性をもつことを示している。同調的な受容的用法 ((5)や(6)) では、相手の意見にことわざの権威を付与し、それが陳腐であるとの特徴づけは行わない。これとは対照的に、受容的用法を批判に向ける場合には、ことわざによって相手の意見が陳腐であることを指摘し、それに権威を与えるなどということはない。2つの場合では、ことわざが帯びる権威と陳腐さのどちらを相手の意見に結びつけるかが全く異なっている。この点に引きつけるなら、受容的用法の批判的使用は、ことわざの陳腐さを活用するレトリックと特徴づけられる⁹。

受容的用法の批判的使用は、レトリックとしての強さをもつ反面、自分の思いどおりのことわざを会話相手に帰属させるが故の弱点がある。それは、相手に帰属した意見を、すぐさまの相手に否定されうるという弱点である。(7)においても、Debenham の発言(7i-m)に対して Poirot はすぐさまその正しさを否定している(7n)。この弱点は、受容的用法を批判的に用いられた側の立場から考えてみると分かりやすい。議論の相手がことわざを使って「お前はこう思っているんだろう」と指摘してきたとしよう。仮にそれが的を射たものであったとしても、その正しさを認めることなどしないはずだ。もしそんなことをすれば、議論そのものに負ける結果になりかねない。自らの主張に基づいてことわざを会話の相手に帰属させても、当の相手から同意を引き出すことは難しい。これは受容的用法の批判的使用がもつ負の側面と言えるだろう。

3.4 受容的用法のまとめ

以上、3つの事例の仔細な観察をとおして、ディスコースにおいてことわざが受容的に使用される際の特徴を明らかにしてきた。この節で明らかにしてきた受容的用法の特徴をまとめると、以下のようになる。

⁹ ことわざの権威と陳腐さは共に、それらが繰り返し使用されてきた定型句であるということに由来する。ことわざが権威的であるのは無数の人々にその正しさが認められ続けてきたからあり、その反面、往来で出来合いの態度を内包するが故に陳腐でありえる。受容的用法の二面性は、このように、ことわざという言語資源の性質と結びついている。この点に関しては、5節で述べる今後の展望とも関わる。

- (8) i. ことわざを会話相手に帰属させ、その相手が発言した内容に対する理解の仕方を実演的に示す方法である。
- ii. 相手の意見を表すことばとしてことわざを使用するため、他の用法にはない特有の帰結をもたらす。
 - a. 会話相手の発言内容にことわざの社会的権威（や、ときには紋切り型の陳腐さ）を付与することとなる。
 - b. 実演した理解の仕方に対して、当の会話相手からの評価を受ける。

4. 受容的用法とことわざ研究の方法

受容的用法を記述することの意義は、何よりもまず、ことわざにはこれまで等閑視されていた新たな使い方があることを実証的に指摘した点にある。が、それと同様に重要なのは、この用法に接近する際にとった方法論的な構えである。

従来のレトリック研究には、ことわざの使用を話者同士の社会的な関係と固定的に紐づけて語る系譜がある。例えば瀬戸 (1988: sec. 3.3)は、ことわざは現実をありのままに受け止めようとする姿勢（「諦念」）を説くものであり、目上の者が目下の者に対して用いるのが基本であると論じた。また、Yankah (1994: 3387)は、複数の社会において、ことわざは年長者が若年者に向けて主に教育的な目的で使用するものと見なされていると述べている。同様に、Arewa & Dundes (1964)は Yoruba 族の社会では話者の社会的地位や話者同士の関係に応じて使えることわざが定まっていることを、Lieber (1994)は Ponape 族の社会において部族内の階級によって使用してよいことわざが決まっていることを、それぞれ指摘した。ことわざの使用にまつわる従来の研究には、このように、ことわざの使用を話者が置かれた社会的なコンテクストを指針として記述する傾向がある。

受容的用法にこれと同じやり方で接近するなら、例えばことわざを引く際の「上から下へ」というルール（瀬戸, 1988: 116）との関係を論じる、といった方向で考察を行うことになるだろう。このルールによると、ことわざは基本的に目下の相手を諭す際に用いられる。これに対し、(5)や(6)では、話者（部下や息子）が目上の相手（上司や母親）に向けてことわざを使用している。ごく表面的に観察するなら、こうした事例は「上から下へ」というルールに反するものであるかのように見えるかもしれない。だが、そこで話者が行なっているのは、目上の相手の発言や考えへの同調的な理解を示すことであり、意見の主張や説得ではない。目上の者から目下の者に向けられた意見をことわざに

よって捉えている点において、(5)や(6)も目上の話者が目下の相手に意見を述べる場合と同様である。したがって、受容的用法は目下の側から「上から下へ」というルール」をなぞる方法と位置づけられる。ことわざの使用を話者が置かれた社会的なコンテクストを参照しながら記述するならば、受容的用法の記述はこのようになる。

もちろん、こういった記述方法に価値がないわけではない。「上から下へ」というルール」を参照しながらも目下の話者がことわざを使用するという点は、受容的用法に固有の特徴である。しかし、これまでの方法に愚直である限り、受容的用法に関して本稿が示してきたような詳細(3.4節を参照)を明らかにすることはできなかつただろう。話者同士の社会的な関係のみと紐づけるという従来の研究方法は、ことわざの使用が有する特徴を記述するための指針として十全ではない。

受容的用法の特徴を記述するにあたって本稿が採用した方法は、ことわざの使用に対してディスコース的に接近していく、というものであった。つまり、受容的用法を話者の社会的なコンテクスト(集団内での地位や他者との関係)に根ざす固定的なものとして眺めるのではなく、ことわざが受容的に用いられる過程をディスコースの動的な展開のなかで観察する、という方法である。受容的用法の諸特徴を浮き彫りにすることができたのは、本稿がそれぞれの事例に対してこの構えをとったからにほかならない。この点において、本稿の記述はことわざ研究の方法論的な価値をもつ。

本稿の方法は、さらに、レトリック研究の新たな方向を示すものでもある。レトリックは意見の主張や説得に関わる言語表現の技術という側面をもつ(野内, 2002: 5-6; 柳澤・中村・香西, 2004: i-ii; ルブール, 2000: 12-13)。自分の意見を述べる、他者を説得するといった営みは、極めて日常的でありふれた活動だ。とすると、実際のディスコースを対象に主張や説得の技術としてのレトリックの働きを明らかにすることは、レトリック研究にとって重要な課題であるはずだ。

しかし、この課題に取り組む研究はこれまでほとんどなされていない。伝統的なレトリック研究は修辞学としての色合いが強く、文学的なテキストにおける文彩を主な考察対象としてきた(佐藤, 1992: 47-50; 瀬戸, 1992: 250)。また、近年のレトリック研究において重要な成果を上げてきている認知言語学も、その中心的な関心をメタファやメトニミなどの比喩表現とヒトの認知能力との関わりを明らかにすることに向けており(Dancygier & Sweetser, 2014: 1-3)、主張や説得といった観点からレトリックを眺めてはいない。非形式論理学はレトリックを論証の型式として扱うものの、論説文などのジャンルにおいてレトリッ

クを論法として用いる際の規範を示す傾向が強く、日常的なディスコースのなかでレトリックが実際にどう利用されているのかを記述する姿勢は希薄である (e.g., van Eemeren & Grootendorst, 1992 ; van Eemeren et al. (eds.), 1987 ; Walton, 1987, 1995)。このように、これまでのレトリック研究は、ディスコースにおけるレトリックの働きを十分には記述してこなかった。

人々がレトリックを実際にどのように用いているのか、その具体的な方法を仔細に観察し記述していく。これが、これからのレトリック研究のひとつの価値ある方向である¹⁰。本稿がことわざの受容的用法を記述するにあたって用いた方法は、ことわざ研究だけでなく、レトリック研究の新たな方法としての価値ももつ。

以上のような方法論的な意義をもつ反面、本稿の記述はあらゆる点で完全なわけではない。記述の有効性に関して、データの質に注意が必要である。本稿では、フィクション作品における登場人物の会話、つまり人工的に作り上げられた会話をデータとした。この点は次のような疑問を提起しうる。つまり、ことわざの受容的用法はフィクションの会話を組み立てる場合に現れるもので、自然会話では観察されないのではないか。具体的に述べよう¹¹。

かつて Sacks は、話し相手のことばへの理解の示し方として、理解を主張する (claim) ことと理解を実演する (demonstrate) こととを区別できると論じた (Sacks, 1992, vol. 2: 141-142)。これに対し Heritage (2007: 255-259) は、日常会話において理解の実演はあまり見られない、と論駁した。なぜなら、理解の実演は会話の流れをせき止めて発されるものであるが、話者は会話の流れを進めることを優先して、いちいち理解を実演しようとはしないからだ。さて、ことわざの受容的用法はまさに理解を実演し、それによって説得されたことを示すものである。だから、わざわざ会話の流れをせき止めてまで、相手が言ったことをことわざを使って受容することなどあまり起きないのではないか。実際、日常会話に従事していて、相手の言うことをことわざで受け止めることなど、そう頻繁に生じるようには思えない。

ことわざの受容的な使用に関して、こうした反論は示唆的である。会話という活動に従事することと、登場人物同士の会話を組み立てるという活動との間

¹⁰ 実際、こうした関心を共有する研究が少しずつ行われ始めている (e.g., Cameron, 2011 ; Semino, 2008)。

¹¹ 以下の反論は、ことわざの使用に関する未発表論文に対して『社会言語科学』の査読者から頂いたものである。この反論を受けたことで、データと記述の有効性についての考察を深めることができた。記して感謝申し上げる。

には、確かに大きな隔たりがある。映画の登場人物同士の会話をデータとする以上、上のような批判は免れられない。

しかし、だからといって本稿の記述と議論が無価値だというわけではない。なぜなら、たとえフィクションの会話でしか観察されないものであったとしても、ことわざという言語資源が相手のことばへの理解の仕方を実演するために利用可能であるということは、紛れもない事実だからである。加えて、日常会話では（理解の実演として）受容的にことわざが用いられることはあまりないという指摘は、会話の場で受容的にことわざを使うことはできないということの意味するわけではない。相手の発言内容にことわざを当てはめることで理解の仕方を示す行為は、日常会話においても十分に可能である。とすると、ことわざのこうした使い方とその仕組みとを明らかにすることにも、やはり価値があるといってよいはずだ。データの質に関して完全ではないとしても、依然として、本稿は受容的用法の特徴を記述した点において有意義である。

5. おわりに

本稿は、これまで指摘されることのなかったことわざの受容的用法を記述し、その特徴を明らかにした。また、具体的な記述の作業に基づいて、ことわざ研究の方法論についても議論した。

最後に、本稿では議論できなかった点に触れ、今後の展望を示そう。まず、ことわざには受容的用法を含め複数の使い方が存在するが（cf.2.2 節）、それらは互いにどのように関係するのか。この間に答えることで、ことわざという言語資源に可能な使い方を体系的に明らかにできるだろう。次に、個別のことわざの言語的特徴（例えば対句法や条件文構造の利用）とことわざの用法とは、どのような関係にあるのか。全てのことわざに全ての用法が可能なのか。そうでないとすれば、どういうことわざをどの用法で用いることができるのか。また、それぞれのことわざについて可能な用法に偏りがあるとすれば、それはなぜなのか。これら一連の問は、ことわざの形態と使用方法との関係を明らかにするうえで重要だ。そして最後に、ことわざは他の言語資源とどのような関係にあるのか。例えば比喩表現(*figurative expression*)と用法を比較することによって、ことわざに固有の特徴を明らかにするとともに、それらと共通の側面をも示すことにつながるだろう。

ことわざには未だ解き明かされていない謎が残っている。ここに挙げた問はそうした謎のごく一部に過ぎないし、これらの間に答えることが今後のことわざ研究が進むべき唯一の方向であるというわけでもない。しかし、ディスコースにおける実際の使用に寄り添ってことわざを眺める姿勢をとる限り、それら

は避けて通ることのできない重要な問である。本稿が行なった受容的用法の記述は、そうした問に答えていくための通過点である。

参考文献

- 伊原紀子. 2017. 「コミュニケーション・ストラテジーとしての想定引用」『社会言語科学』 19: 2, 27-42.
- 串田秀也. 2006. 『相互行為秩序と会話分析: 「話し手」と「共-成員性」をめぐる参加の組織化』 京都: 世界思想社.
- 佐藤信夫. 1987. 『レトリックの消息』 東京: 白水社.
- 佐藤信夫. 1992. 『レトリック感覚』(講談社学術文庫版) 東京: 講談社.
- 瀬戸賢一. 1988. 『レトリックの知: 意味のアルケオロジを求めて』 東京: 新曜社.
- 瀬戸賢一. 1992. 「拡大するレトリック」 安井泉(編) 『グラマー・テキスト・レトリック』 235-264. 東京: くろしお出版.
- 武田勝昭. 1992a. 『ことわざのレトリック』 東京: 海鳴社.
- 武田勝昭. 1992b. 「ことわざのディスコース」 安井泉(編) 『グラマー・テキスト・レトリック』 211-232. 東京: くろしお出版.
- 武田勝昭. 1999. 「ことわざによるトピックの要約」『語用論研究』 1, 15-28.
- 野内良三. 2002. 『レトリック入門: 修辞と論証』 京都: 世界思想社.
- 林誠. 2017. 「会話におけるターンの共同構築」『日本語学』 36: 4, 128-139.
- 柳澤浩哉・中村敦雄・香西秀信. 2004. 『レトリック探究法』 東京: 朝倉書店.
- 山口治彦. 2009. 『明晰な引用, しなやかな引用: 話法の日英対照研究』 東京: くろしお出版.
- ルブール, オリヴィエ (Reboul, Olivier). 2000. 『レトリック』 佐野泰雄(訳) 東京: 白水社.
- Arewa, Ojo E. and Alan Dundes. 1964. "Proverbs and the ethnography of speaking folklore." *American Anthropologist: New Series*. 66: 6, part 2, 70-85.
- Atkinson, J. Maxwell and John Heritage (eds.) 1984. *Structures of Social Action: Studies in Conversation Analysis*. Cambridge; New York: Cambridge University Press.
- Burke, Kenneth. 1973. *The Philosophy of Literary Form: Studies in Symbolic Action*, 3rd ed. Berkeley, LA; London: University of California Press.
- Cameron, Lynn. 2011. *Metaphor and Reconciliation: The Discourse Dynamics of*

- Empathy in Post-Conflict Conversations*. New York: Routledge.
- Canary, Daniel J. and Alan L. Sillars. 1992. "Argument in satisfied and dissatisfied married couples." William L. Benoit, Dale Hample, and Pamela J. Benoit (eds.) *Readings in Argumentation*, 737-764. Berlin; New York: Foris Publications.
- Cram, David. 1994. "The linguistic status of the proverb." Wolfgang Mieder (ed.) *Wise Words: Essays on the Proverb*, 73-97. New York: Routledge.
- Dancygier, Barbara and Eve Sweetser. 2014. *Figurative Language*. Cambridge; New York: Cambridge University Press.
- Drew, Paul and Elizabeth Holt. 1988. "Complainable matters: The use of idiomatic expressions in making complaints." *Social Problems*. 35: 4, 398-417.
- Drew, Paul and Elizabeth Holt. 1998. "Figures of speech: Figurative expressions and the management of topic transition in conversation." *Language in Society*. 27, 495-522.
- Dundes, Alan. 1975. "On the structure of the proverb." *Proverbium*. 25, 961-973. (also in Wolfgang Mieder and Alan Dundes (eds.) 1981. *The Wisdom of Many: Essays on the Proverb*, 43-64. New York: Garland Publishing.)
- Hain, Mathilde. 1951. *Sprichwort und Volkssprache: Eine Volkskundlich-Soziologische Dorfuntersuchung*. Gießen: Wilhelm Schmitz.
- Heritage, John. 2007. "Intersubjectivity and progressivity in reference to persons (and places)." Tanya Stivers and N. J. Enfield (eds.) *Person Reference in Interaction: Linguistic, Cultural and Social Perspectives*, 255-280. Cambridge: Cambridge University Press.
- Lerner, Gene H. 2004. "Collaborative turn sequences." Gene H. Lerner (ed.) *Conversation Analysis: Studies from the First Generation*, 225-256. Amsterdam; Philadelphia: John Benjamins.
- Lieber, Michael. 1994. "Analogic ambiguity: A paradox of proverb usage." Wolfgang Mieder (ed.) *Wise Words: Essays on the Proverb*, 99-126. New York: Routledge.
- Merriam-Webster.Com, Apr. 27 2017. <https://www.merriam-webster.com>
- Milner, George B. 1969. "Quadripartite structures." *Proverbium*. 14, 379-383.
- Norrick, Neal R. 1985. *How Proverbs Mean: Semantic Studies in English Proverbs*. Berlin; New York; Amsterdam: Mouton Publishers.
- Rothstein, Robert A. 1969. "The poetics of proverbs." Charles Gribble (ed.)

- Studies Presented to Professor Roman Jakobson by his Students*, 265-274.
Cambridge, MA: Slavica Publications.
- Sacks, Harvey. 1992. *Lectures on Conversation*, 2 Vols. Cambridge, MA.;
Oxford: Blackwell.
- Schegloff, Emanuel A. 2007. *Sequence Organization in Interaction: A Primer in
Conversation Analysis I*. New York: Cambridge University Press.
- Schegloff, Emanuel A. 2015. "Conversational interaction: The embodiment of
human society." Deborah Tannen, Heidi E. Hamilton and Deborah Schiffrin
(eds.) *The Handbook of Discourse Analysis*, 2nd ed., Vol. 1, 346-366.
Chichester: Wiley Blackwell.
- Semino, Elena. 2008. *Metaphor in Discourse*. Cambridge; New York: Cambridge
University Press.
- Silverstein-Weinrich, Beatrice. 1978. "Towards a structural analysis of Yiddish
proverbs." *Yivo Annual of Jewish Social Science*. 17, 1-20. (also in
Wolfgang Mieder and Alan Dundes (eds.) 1981. *The Wisdom of Many:
Essays on the Proverb*, 65-85. New York: Garland Publishing.)
- Svartvik, Jan and Randolph Quirk. 1980. *A Corpus of English Conversation*.
Lund: CWK Gleerup.
- van Eemeren, Frans H. and Rob Grootendorst. 1992. *Argumentation,
Communication, and Fallacies: A Pragma-Dialectical Perspective*. Hillsdale,
NJ: Lawrence Erlbaum Associates Publishers.
- van Eemeren, Frans H., Rob Grootendorst, J. Anthony Blair and Charles A. Willard
(eds.) 1987. *Argumentation: Across the Lines of Discipline (Proceedings of
the Conference on Argumentation 1986)*. Dordrecht; Providence: Foris
Publications.
- Walton, Douglas. 1987. *Informal Fallacies: Towards a Theory of Argument
Criticisms*. Amsterdam; Philadelphia: John Benjamins.
- Walton, Douglas. 1995. *A Pragmatic Theory of Fallacy*. Tuscaloosa, AL: The
University of Alabama Press.
- Yankah, Kwesi. 1994. "Proverb." R. E. Asher and J. M. Y. Simpson (eds.) *The
Encyclopedia of Language and Linguistics*, 3386-3389. Oxford; Tokyo:
Pergamon Press.